

講義① 窪園晴夫氏 (国立国語研究所副所長、日本言語学会前会長)

日本語母方言から始める英語教育

講義概要

ことばの教育は母語である日本語から始めるべしという議論がありますが、多くの日本人にとって母語は日本語の各方言であり、標準語ではありません。母語から始めるべきというのであれば、自分の母方言から始めるべしということになります。その一方で、コミュニケーションのためには方言は無用であり、コミュニケーションを阻害する要因になっているという見方もあります。この講演では、方言の大切さを社会、学問、個人、教育の4つの観点から考察し、日本語でまずバイリンガルになることが英語教育をスムーズに始めるための基盤になること、そしてそのようなことばの教育が子供たちの全人教育や差別のない社会作りに重要な役割を果たすことを解説します。日本の諸方言が急速に消滅しつつある中で、今がそのような教育を実践する絶好かつ最後のチャンスであることをお話ししたいと思います。

講義 大津由紀雄氏 (明海大学副学長、慶應義塾大学名誉教授)

素朴言語学からの脱却をめざす『ことばの教育』

講義概要

認知心理学に「素朴理論」と呼ばれる考えがあります。たとえば、子どもたちはある時期まで「生物とはなにか？」という問いに対して、「動くもの」という答えを持っています。子どもが持つ生物概念ですね。それが発達とともに、そして、場合によっては教育の支援を得て、その生物概念が変化していきます。

ことばの問題が素朴理論と概念変化との関連で論じられることはほとんどありません。しかし、ことばの教育を考えるときにはこの視点は大変に重要だと考えるようになりました。今回の講義では、①ことばを対象にした素朴理論（「素朴言語学」）について説明し、②素朴言語学からの脱却が子どもにとって（そして、おとなにとっても）重要であることを指摘し、③素朴言語学からの脱却を目指す「ことばの教育」について考えてみたいと思います。話のなかで、次期学習指導要領の中に、素朴言語学からの脱却への志向性が秘かに埋め込まれていることにも触れたいと思います。

講義とワークショップ 村上加代子氏 (神戸山手短期大学准教授)

英語の音韻認識とデコーディング習得

講義概要

みなさんはトム・クルーズ、スティーブン・スピルバーグに共通する、ある“学習の困難”をご存じでしょうか。それは英語圏では10人に1人以上とも言われる、ディスレクシア (dyslexia) です。日本語の読み書き障害の出現率は2~4%とも言われますが、英語は他の言語と比べてもその数が非常に多いことで知られます。近年のディスレクシアや読み発達研究では、個人の認知処理特性以外の言語の特徴（音韻と文字の対応など）もディスレクシアの出現率に影響すると言われ、英語の場合は特に音韻の認識と処理の弱さがその原因として指摘されています。近年日本でも注目されているフォニックスは、文字の音声化（デコーディング）のための指導法です。ですが音韻認識が十分に育っていなければ、フ

オニックスをしても英語の読み書きにつまずく可能性が大きくなります。初期のリテラシー指導ほど、次のステップへのレディネスを丁寧に育てて行くことが大切です。講義では読み書きに必要な認知スキル、そして英語の音韻認識の発達とデコーディングについて概説します。次に日本の児童生徒を対象とした英語の音韻認識活動とデコーディング指導の簡単なワークショップを行います。

講義とワークショップ 齋藤ひろみ氏 (東京学芸大学教授)

「社会参加のためのことば」を育む—外国人の子どもの日本語教育の実践から—

講義概要

海外から日本へと移動してきた子どもたち、いわゆる外国人の子どもは、日々、母語・母文化と日本語・日本文化が交差する中で暮らし学んでいます。かれらがその文化的多様性を資本に、これまでの学びに今日の学びをつなぎ、そして、自己実現のために「ことば」の力を発達させる環境を創り、教育・支援をすることが、日本語教育に携わる者の使命だと思います。講義では、小中高等学校の日本語教育の実践事例をもとに、文化間の移動によって分断されがちな子どもたちの学びを結び、社会参加のためのことばの力を育む教育の方法について検討します。その後、海外から日本にやってきた子どもたちが日々経験している社会的な場面や課題を設定し、そこでの参加にはどのような「ことば」の力が必要か、また、その力を育むためにどのような活動を通して日本語を学ぶ機会を提供するのがよいのか考えます。

ワークショップを中心に 末岡敏明氏 (東京学芸大学附属小金井中学校教諭)

『ことば』を教える英語教育

講義概要

偉い人は「日本語を使っちゃだめ」とか「コミュニケーションしなきゃだめ」みたいなことばかり言うし、学校の先生は「丸暗記しても役に立たない」とか「相手の目を見て話さないといけない」みたいなことばかり言うし、とにかく英語教育の世界は「だめだめ攻撃」と「ないない攻撃」だらけ。「英語の周辺」について熱心になるのもいいんですが、「英語そのもの」についてはどれだけきちんと教えられているのかが気になるどころ。

ワークショップでは、「英語」について、さらには、「ことば」について、身近なものから題材を集めて考えてみるということを行います。「英語」や「ことば」が今までとは違った姿に見えてくるのではないのでしょうか。

受講生の方には英語の先生以外の人も多いでしょうが、私のワークショップでは英語の力は必要としませんからご心配は不要です。日本語を話題にすることが多いので、気楽に参加してください。

ワークショップを中心に 齋藤理一郎氏 (群馬県立太田フレックス高校教諭)

多文化体験ワークショップ

—教科書の登場人物は、いい人ばかり？ことばはハラハラ・気持ちはウラハラ—

講義概要

高校英語の検定教科書に出てくる会話文は、語いや使用構文に制限がある中で、複数の

登場人物の思惑が交錯します。少ない文章量の中には、「？」と思うようなやり取りもあり、教師は「執筆者は苦勞したんだろうなあ」と思いながら読み進めます。と、実際の教室では、高校生から「素直な感想」が飛び出て、教師は驚きと戸惑いが隠せません。会話文読解から垣間見える「現代っ子のコミュニケーション」を考察します。

後半は、「ではオトナは、目的達成のために、どんなふうにとことばを駆使するのか？」を、参加者のみなさんに体験してもらおう演劇ワークショップを行ないます。白熱してケンカにならないように、「ことばの駆け引き」ゲームを楽しみましょう。